

登窯（陶榮窯）

この印象的なレンガ造りの建物は、やきもの散歩道 A コース沿いの丘の上に、傾斜約 17 度で建っている。常滑最後の「登窯」である。

登窯とは、斜面に築かれた窯のことで、その起源は中国にある。17 世紀初頭に朝鮮半島を經由して日本に伝わり、常滑では 1830 年頃から使われていた。陶榮窯は 1887 年から 1974 年まで操業していた。

窯は小部屋に分かれており、大量の陶器、特に施釉されたものをエネルギー効率よく焼成することができる。陶榮窯には 8 つの焼成室があり、薪と石炭を燃料としていた。高さの異なる 10 本の煙突は、窯の中の温度を均一に保つことができる。窯は、近隣の窯元が交代で見守る共同作業という形で運営されていた。

19 世紀半ばから日本は急速に近代化し、1910 年代には 60 ほどの登窯が常滑で操業していた。登窯では全国で使用される盆栽鉢や急須を生産していた。20 世紀半ばの技術の向上や環境規制の強化により、陶榮窯での生産は 1974 年に停止された。

陶榮窯は、1982 年に国の重要有形民俗文化財に指定され、2007 年には近代化産業遺産にも認定された。